『あざ』の意味について

上　野　征　支*

On the Meaning of *The Birthmark*

Masashi UENO

要　旨

ホーソーンの短編小説『あざ』にみられる罪の問題を中心に作品を分析し，その背景と意味を考察する。

Synopsis

In this article I intend to analyze the contents of the short story, "*The Birthmark*", written by Nathaniel Hawthorne, chiefly from the viewpoint of the problems of sin and to study the background and the meaning of the work.

I

ホーソーンは，アメリカ植民地時代のとくにボストンやセイレムを中心としたニュー・イングランドの歴史や伝説を取り扱った作品を多く書いている。それは，清教徒の先祖をもつホーソーンが，ニュー・イングランドの歴史や伝説に深い興味を持っていたことと，大学卒業後の10数年間，世間から離れて実家で孤独の作家修業をしていたホーソーンにとっては，読書がほとんど唯一の題材入手源であり，その中でもとくに身近かなニュー・イングランドの歴史や伝説が，手にはいりやすかったからであろうと考えられる。

また，当時のアメリカは，政治上でも，文芸上でもイギリスから独立して，独自のものを作り出そうとしていた時であり，アメリカ的なものが求められ，高揚されていた時であったことも，その要因の一つと考えられよう。

しかし，ホーソーンは，こういった歴史物に対して，もう一方では，時と所を超越した作品も数多く書いている。とくにホーソーンが関心を持ったのは，中世趣味と怪奇主義であったように思われる。作品の中に登場する人物は，どことなく中世ふうの学者であったり，錬金術，不老不死の霊薬，生命の創造に関するものなどが出てくる。また，魔法や魔法使いの話が出てきて，現実の世界ではとうてい起こるはずもないような起自然現象や怪異が行なわれたりする。これは，当時ヨーロッパとくにイギリスで大流行していた怪奇小説，恐怖小説の影響と考えられ，やはり，ホーソーンの精力的な読書の所産であったと思われるのである。

このように，実社会における体験の乏しかった[1]ホーソーンは，題材を歴史と架空の世界に求めたが，それには豊かな想像力が必要であった。とくに架空の世界を描くには，すべてが作者の頭の中で作り上げられなければならなかった。想像力たくましかったホーソーンにとって，あのわびしい部屋で一生懸命短編小説を書いていたころは，小説のアイディアが雲のように心に湧いたというが，ホーソーンはそれを彼の創作日誌ともいうべきノートブックに克明に書き留めているのである。

それは1835年から51年までの創作日誌に極めて多数書き留められているが，単なる小説の素材である場合もあるが，その多くはアイディアである。ホーソーンの小説が観念の小説といわれる所以もこのへんにあるかもしれない。また，その観念は多くの場合教訓的，道徳的傾向が強いということもホーソーンの特徴の一つと考えられる。

* 助教授　一般教科英語

ホーソーンは，短編であると長編であるとにかかわらず，ほとんどの作品で，罪の問題を中心テーマとして取り扱ったが，ホーソーンの言う罪は，犯罪とか悪徳そのものというよりは，もっと精神的，道徳的なものである。具体的な罪の行為を問題にするのではなくて，人間の原罪とか，人間の本性，限界，誤りやすい性質，巻き込まれる弱さ，不当な態度，悔恨と謙虚の欠如，人間の精神に対する愛と尊敬の欠如，高慢，冷酷，偏狭な心の存在などを問題にするのである。そして，そういった罪とその結果が主要テーマとなり，象徴的に描かれていることが多い。彼の長編小説『緋文字』は，こういった問題を取り扱った最も典型的な代表作であるが，ここではその一つの原型としての意味をもつ短編小説『あざ』*The Birthmark*を取り上げて，罪の問題を中心に，作品の意味とその背景について考えてみたい。

II

まず，『あざ』の梗概を簡単に述べてみたい。

時代は18世紀後半のことで，国はとくに明らかにされていない。とにかく，電気の発見をはじめとして，自然界の神秘が次々と解明されていき「ついには，科学者が創造力の秘密に手をかけ，おそらく独力で新しい世界を作りかねないほど[2]」科学技術が著しい発達を遂げていたころ，その自然科学のあらゆる分野において著名な大家となったエイルマー（Aylmer）という科学者が主人公である。彼は長年研究ひとすじに打ち込んできたが，つい最近，実験室を助手に託し，ジョージアナ（Georgiana）という美しい女性を口説いて妻に迎えたばかりである。そして，家庭生活と研究生活がうまくいくかと思われたのだが，結婚後さほど日もたたない或る日，エイルマーは，顔に苦渋の色を浮かべて新妻の顔をじっと見つめていたかと思うと，ついに耐えきれずに，妻に向かって次の問いかけをするところから悲劇は始まるのである。

"Georgiana", said he, "has it never occurred to you that the mark upon your cheek might be removed?"[3]

つまり，エイルマーは妻に対して，彼女の頬のあざを取り除かないかと，暗に提案しているのである。実は，ジョージアナの左頬の中央に，一つの「あざ」(a singlar mark) があったのである。それは人間の手の形をした極めて小さな，深紅色を帯びたあざで，いわば彼女の顔のきめと地に深く織り込まれていて，彼女のその時々の顔色によって，ぼやけて消えたり，また逆にはっきりと現われたりするのであった。

さて，ジョージアナは，これまでそのあざを彼女の魅力の一つだと周囲からよく言われてきたので，そのつもりでいたのだが，引き続いて述べられた，夫の次の言葉によって深く傷つけられるのである。

"……No, dearest Georgiana, you came so nearly perfect from the hand of Nature that this slightest possible defect, which we hesitate whether to term a defect or a beauty, shocks me, as being the visible mark of earthly imperfection,"[4]

このごく小さな頬のあざが，「この世の不完全さの目に見える印」としてショックだと言われたジョージアナは，いまさら何をと憤慨するが，エイルマーのあざに対するこだわりは，ますます深まっていくのである。

確かにそのあざは，他に非のうちどころのないジョージアナの美しさを損う唯一の欠点とも言うべきしみであるが，いまやエイルマーにとっては，それは単なるしみに止まらず，自然によって刻印された人間の致命的なきず（the fatal flaw of humanity[5]）であり，妻の罪，悲しみ，衰退，及び死への性癖の象徴（the symbol of his wife's liability to sin, sorrow, decay, and death[6]）とまでなって，彼はすっかりあざの妄想にとりつかれてしまう。そして，朝起きがけのうす明りの中で，また，夕べのいろりばたで，彼の視線はかたわらの彼女の頬に秘かに向けられ，その奇怪な手形を深刻な気分で見つめるのである。

やがて，ジョージアナは，夫の視線を意識し，その凝視に身震いを覚えるようになる。

そして，ついにある晩，ジョージアナは自ら夫に向かって，そのあざの摘出の可能性を問い，いかなる犠牲をはらってでも，手術をしてくれと懇願する。妻のあざの手術を夢にまで見ていたエイルマーは，狂喜して自信満々に引き受ける。

翌日，エイルマーは，既に立ててあった計画を彼女に話す。エイルマーは，再び実験室に閉じこもって，実験を始め，ジョージアナも準備のために隣りの部屋に引きこもることになった。二人が実験室のしきいをまたいだとき，悪寒を覚えたジョージアナは，彼女を介抱しようとしてくれた夫が，彼女の頬の真赤なあざを見て発作的な身震いをしているのを知り，ついに気絶してしまう。

エイルマーは，助手のアミダナダブ（Aminadab）に手伝わせて，彼女を予定の部屋に入れるのである。

やがて，彼女が気がついてみると，実験室を改造したその部屋は，香がたかれ，すばらしいカーテンが掛けられ，きれいなランプがともされた立派な部屋であった。

この部屋で，エイルマーは，彼女の不安と緊張をほぐし，退屈を紛らわすために，種々の実験をして見せるが，いずれも不十分に終わる。そこで彼は，錬金術師が長年求めた万能溶媒や不老不死の霊薬の話を聞かせ，理論的にはそれを作る能力のある自分にとって，この小さなあざを取り除くのに必要な技術がいか微々たるものであるかを吹聴する。そして彼女の体調を観察すると共に，彼女の治療薬の研究に没頭するのである。

その間，退屈なジョージアナは，書棚の書物を読んでみる。彼女にとって最も面白かった本は，夫自身の書いたもので，それは彼のこれまでの科学研究の記録であり，彼の名声を高めた多くの業績が収められていたが，それでも人間の手で書かれたもののうちで最も暗い（melancholy）記録であったという。彼女は夫のことをかなり理解し，また彼に対する尊敬と愛情の念を新たにするのである。

さて，そうこうしているうちに，ジョージアナは彼女の体内に感じられた微かな変調を夫に知らせたいと思い，初めて夫の実験室に入る。そこで彼女が見たものは，自分の部屋とは好対照に飾り気がなく，ガスの臭いが充満している実験室と，その中にあるあらゆる化学研究装置であった。そして，もっとも彼女の注目を引いたのは，真青で，不安そうに夢中になって炉の上にかがみこんでいる夫の顔つきであった。それは，これまでに彼が彼女に向けてきたあの楽天的で楽しげな態度とは何と違っていたことか。

エイルマーは，彼女を見とがめるが，彼女にくいさがられて，ついに真相を明かす。彼女のあざが表面的なものではなく，想像以上に深くて，実験には危険性があるというのである。しかし，いまや自分の忌まわしいあざを取ることに執念を燃やすようになったジョージアナは，次のように叫んで彼を促すのである。

"Danger? There is but one danger —— that this horrible stigma shall be left upon my cheek !" cried Georgiana, "Remove it, remove it, whatever be the cost, or we shall both go mad!"[7]

彼女にとって最も恐ろしいのは，このままあざがもとで二人の結婚生活が破滅することなのである。

さて，彼女が部屋にもどり，物思いに耽って休んでいると，やがて，エイルマーが緊張した面持ちで，無色の液体のはいった杯を持ってやって来る。

「薬の調合が完成した。私の知識に誤りがなければ失敗するはずがない[8]」と言って，窓ぎわの植物にテストしてみる。するとその植物の葉についていた黄色いしみが消えはじめる。ジョージアナは，夫を信じてその液体を飲みほし，ぐっすりと眠りに就く。エイルマーは彼女の傍らで，細心の注意を払いながら観察を続ける。すると，彼女の頬のあざが虹のごとく次第に消えていくのである。実験は成功したのだ。有頂天になったエイルマーは，何故か前よりも青白いジョージアナの顔に自然の光を当てようとカーテンを開けると，助手のアミナダブの笑い声が聞こえてくる。エイルマーが狂喜のことばを発していると，目をさましたジョージアナは，彼の用意した鏡を覗いて，あざがほとんどなくなっているのを認め，かすかに微笑む。

ところが，悲しいかな，ジョージアナは，有頂天になっているエイルマーに対して，次の別れのことばを残して，息を引きとるのである。

"My poor Aylmer", she repeated, with a more than human tendernss, "you have aimed loftily ; you have done nobly. Do not repent that with so high and pure a feeling, you have rejected the best the earth could offer, Alymer, dearest Aylmer, I am dying!"[9]

エイルマーの目的は高尚だったし，行為も気高かった。だから，かくも気高く純粋な気持ちで，この世が与えうる最善のものを拒否したことを後悔するなというのである。

そして，ジョージアナの魂は，彼女の頬のあざが完全に消えると同時に，昇天する。すると再び，アミナダブのしわがれた忍び笑いが聞こえるのである。

最後に，作者はエイルマーについて次のように述べて，この物語を閉じている。

Yet, had Aylmer reached a profounder wisdom, he need not thus have flung away the happiness which would have woven his mortal life of the selfsame texture with the celestial. The momentary circumstance was too strong for

him ; he failed to look beyond the shadowy scope of time, and living once for all in eternity, to find the perfect future in the present.[10]

（しかし，エイルマーがもっと深い英知に達していたならば，彼はこの世の生命を天上の生命と全く同じ織地で織り合わせてくれたであろう幸福を，このようにして投げ捨ててしまわなくてもよかったのだが。このつかの間の状況は彼にはあまりにも強烈すぎたのだ。彼は時間の暗い境界のかなたを見ることができず，また，一度かぎり永遠に生きて，現在の中に完全な未来を見い出すことができなかったのだ。）というのである。

以上が短編『あざ』のあらすじである。これは一種の science-fiction[11]の観を呈しているが，ホーソーンがこの悲劇において意図したものは，一体何であろうか。次に，この作品の意味と背景について考えてみたい。

III

最初に述べたように，罪の問題は，ホーソーン文学の主要なテーマの一つであるが，短編『あざ』も，これまでみてきたようにその例外ではない。ホーソーンはこの物語りの初めのほうで，「二人の結婚は，まことに著しい結果と極めて印象的な教訓を伴なった[12]」と語っているが，それでは，その教訓とは何を指すのであろうか。それを知ることは，とりもなおさずこの作品の意味を知ることになると思うのである。

ところで，ホーソーンは，1837年10月16日付けの創作日誌の中に，『あざ』の内容に関連があると思われる記事を書きとめている。

A person to be in possession of something as mortal man has a right to demand ; he tries to make it better, and ruins it entirely.

A person to spend all his life and splendid talents in trying to achieve something naturally impossible, —— as to make a conquest over Nature[13].

（この世の人間が求めうる限りの完全なものを所有している男。彼はそれを改善しようとして，完全に破壊してしまう。

本来不可能なあることを達成しようと，全生涯とすぐれた才能を費す男 —— たとえば，自然を征服するというような。）

また，これとほぼ同じ発想の記事が1839年1月4日の日誌にも見られる。

A person to be the death of his beloved in trying to raise her to more than mortal perfection ; yet this should be a comfort to him for having aimed so highly and holy[14].

（彼の愛する女を人間としての完全さ以上に引き上げようとして，その死を招く男，しかし，これは目的がかくも高く高尚だったので，彼には慰めとなるはずだ。）

これらのアイディアは，そのまま『あざ』の骨子となっているので，この作品の解釈に一つの手がかりを与えていると思われる。

上記の性格はすべて科学者エイルマーに具現されているが，一体エイルマーは如何なる罪を犯し，その結果として悲劇を招いたのであろうか。それは自己の能力を過信するあまり，知的高慢の大罪に陥った男の悲劇といえるのではなかろうか。

結婚前はジョージアナの頬のあざを「何とも思っていなかった[15]」エイルマーが，いざ結婚してみると，「他の点では完璧な[16]」美人の妻の唯一の欠点として毛嫌いするのは，彼の愛情面に大いに問題を感じさせるところであるが，とにかく，科学万能時代の寵児ともいうべき彼は，こんな小さなきずくらい自分の手で何とかならないものかと考えたのである。あざに寄せる彼の関心は，一見妻のためのみに発しているように見えて，その実は，自己の研究のためなのである。それは，彼がジョージアナに語った次のことばから伺い知ることができる。

"Georgiana, I even rejoice in this single imperfection, since it will be such a rapture to remove it,"[17]

エイルマーは，実験が成功したあかつきの喜びを与えてくれるものとして，この不完全性をありがたいとさえ思っているのである。

そして，彼の目的は次のことばから一層明らかである。

"Noblest, dearest, tenderest wife", cried Aylmer, rapturously, "doubt not my power. I have already given this matter the deepest thought —— thought which might almost have enlightened me to create a being less perfect than yourself, Georgiana, you have led me deeper than ever into the heart of science, I feel myself fully competent to render this dear cheek as faultless its fellow ; and then, most beloved, what will be my triumph when I shall have corrected what Nature left imperfect in her fairest

work!"[18]

彼の思いはこうじて，自己の科学的な知識や技術を試して，いわば，造化の神，自然にかわって人間を改造してみたいという大望にとりつかれるのである。彼女のあざは，そのための絶好の研究材料なのである。

ここには，「創造主の役割を奪いとる[19]」という思い上がった科学者エイルマーの知的な傲慢さとエゴイズムが浮きぼりにされているように思われる。

エイルマーの孤高，高慢の性格は，彼の助手アミナダブとの比較において，さらに強調されている。

アミナダブは，実験室で卒倒したときのジョージアナを見て，「もし彼女がおれの妻なら，おれは決してあのあざを手放しはしないのだが」("If she were my wife, I'd never part with that birth-mark".[20]) というような世俗的人間の典型なのであるが，エイルマーがアミナダブに向かって呼びかける名称は，次のように徹底している。すなわち，エイルマーにとってアミナダブは，human machine（人間の機械），man of clay（土くれ野郎）[21]であり，clod（土くれ），earthly mass（土のかたまり），thing of the senses（感覚の存在）[22]なのである。

作者も二人を対比して，次のように説明している。

With his vast strength, his shaggy hair, his smoky aspect, and the indescribable earthiness that incrusted him, he (=Aminadab) seemed to represent man's physical nature ; while Aylmer's slender figure, and pale, intellectual face, were no less apt a type of the spiritual element[23].

つまり，すすけた顔，もじゃもじゃの頭髪，彼を包む名状しがたい俗悪さをもつアミナダブが，人間の物質面を代表するのに対して，ほっそりした容姿，青白い知的な顔をもつエイルマーは，人間の精神面を代表しているようだ，というのである。

ここでホーソーンは，完全主義者，理想主義者であるエイルマーに，さらに精神至上主義者としての性格付けを意図しているように思われる。

さて，エイルマーの，夢にまで見るほどのこのあざに対する執念は，当然ジョージアナをも巻き込み，彼女の精神に大きな影響を与えるのである。もともと純情で，他人の言をそのまま信じていたジョージアナが，次第に変わっていくのは，そのことを物語っている。

彼女はエイルマーの凝視に耐えきれず，彼の全面的な愛を求めるとともに，彼の野望実現のためにも，あざの除去手術を積極的に望むようになるのである。勿論，彼女の心の片すみには，女の「虚栄心[24]」なるものが働いていたかもしれない。「彼女が鏡を見るたびにあざが眼について，いまやエイルマー以上にそのあざを忌み嫌うようにさえなった。[25]」のはその表われであろう。原罪の象徴であるあざをもつ女，すなわち，この世の不完全な人間であるジョージアナが，ただ一人の完全な女性になってみたいという魅力に屈したとしても責められまい。

このようにして，高慢にも，理想を追求するあまり，ジョージアナを巻き込み，彼女を死に追いやったエイルマーの罪は大きい。彼はいわば，「神を演じようとして，逆に悪魔を演じている[26]」のである。

しかし，ホーソーンは，エイルマーの理想の希求そのものを非難しているのではない。

この物語の結末でホーソーンは，エイルマーの高い志を認めることばを，ジョージアナに語らせているのである。ホーソーンは，彼女のことばを補って，ただエイルマーがもっと深い英知をもっていたら，あのように幸せを逃がさなくてもよかったのに。あざなどという目先の事情に気をとられたばかりに，現在の中に完全な未来を見い出せなかったのだ，と強調しているのである。

それでは，もっと深い英知とは，また現在の中に未来を見い出すとは，どういう意味であろうか。それは，ジョージアナがエイルマーの性格を見きわめ，結論を下したときの考え方の中に含まれているように思われる。

Her heart exulted, while trembled, at his honorable love, so pure and lofty it would accept nothing less than perfection, nor miserably make itself contented with an earthlier nature than he had dreamed of. She felt how much more precious was such a sentiment, than that meaner kind which would have borne with the imperfection for her sake, and have been guilty of treason to holy love, by degrading its perfect idea to the level of the actual. And, with her whole spirit, she prayed, that, for a single moment, she might satisfy his highest and deepest conception. Longer than one moment, she well knew, it could not be ; for his spirit was

ever on the march —— ever ascending —— and each instant required something that was beyond the scope of the instant before[27].

ジョージアナは，エイルマーの愛はあまりにも純粋で高邁なので，完全でないものは受け入れず，卑俗なものには満足しないであろうと考え，完全をめざす彼の理念の高さに感心はするが，その理念はたえずとどまることがないので，結局彼女には応じきれないものであることを悟ったのである。彼女が真に求めているのは，あざに象徴されているような，人間の不完全を受け入れ，あたたかく包み込んでくれる慈愛なのである。ホーソーンが，もっと深い英知をもち，現在に未来を見い出すというとき，それはまさに，この慈しみと広い心をもって，高い理想をいだきながらも，現実をよく洞察し，受け入れることを指しているのである。そうすることによって，高い理想をかかげながら，いたずらに自滅の道を急いだエイルマーの轍を踏まぬよう，ホーソーンは教えているのではなかろうか。

ホーソーンは『あざ』において，機械文明の進展いちじるしく，理性を重んじた当時の風潮と，新婚生活まもない彼自身の状況をも念頭において，理想と現実のはざまで揺れ動く人間のありようを描いてみせたのではなかろうか。

注

1) Henry James, Hawthorne (A Division of Cornell University Press 1959) p.21
2) Nathaniel Hawthorne, The Birthmark (The Centenary Edition X Mosses From An Old Manse, Ohio State University Press 1974) p. 36
3) Ibid. p. 37
4) Ibid. p. 37
5) Ibid. p. 38
6) Ibid. p. 39
7) Ibid. p. 52
8) Ibid. p. 53
9) Ibid. p. 55
10) Ibid. p. 56
11) Harry Levin, The Power of Blackness, Hawthorne Poe Melville (Faber And Faber, London 1958) p. 57
12) Nathaniel Hawthorne, The Birthmark p. 37
13) Nathaniel Hawthorne, The American Notebooks (The Centenary Edition Vlll, Ohio State University press 1972) p. 165
14) Ibid. p. 184
15) Nathaniel Hawthorne, The Birthmark p. 38
16) Ibid. p. 38
17) Ibid. p. 44
18) Ibid. p. 41
19) Randall Stewart, American Literature and Christian Doctrine (刈田元司訳北星堂昭和33年) p. 103
20) Nathaniel Hawthorne, The Birthmark p. 20
21) Ibid. p. 51
22) Ibid. p. 55
23) Ibid. p. 43 ( ) は筆者加筆
24) Randall Stewart, op. cit. p. 104
25) Nathaniel Hawthorne, The Birthmark p. 48
26) Richard H. Fogle, Hawthorne's Fiction : The Light and The Dark (University of Oklahoma Press, Norman 1964) p.126
27) Nathaniel Hawthorne, The Birthmark p. 52

(昭和53年11月30日受理)